『現代民俗学研究』第 12 号（2020 年 3 月）
Journal of Living Folklore 12（Mar. 2020）

神輿を担ぐことの文化政治

―東京圏の神輿渡御・神輿パレードを事例として―

三　隅　貴　史 *
MISUMI Takafumi

The Cultural Politics of Shouldering *Mikoshi*

A Case Study of the *Mikoshi* parades in the Tokyo Metropolitan Area

In this paper we examine the status of *mikoshi* parades in the contemporary Tokyo metropolitan area and modify the previous theory that festivals in Japan have changed from being rituals to being events. From the 1990s to 2007, the Sanja festival (Taitō ward), the most lively, yet violent, festival in the Tokyo metropolitan area, experienced a period where the organizing committee was unable to control events during the festival's *mikoshi* parade (a parade in which portable shrines are shouldered around the neighborhood). After two incidents in 2006 and 2007, the discourse that the *mikoshi* parade is ritual and tradition was born, and through this discourse the festival organization committee tried to regain their control. Likewise, two *mikoshi* parades celebrating National Foundation Day and the Emperor of Japan were also disrupted. To regain control, the organizing committees of the two parades conducted *shinto* rituals, which pleased the parade participants because *shinto* rituals were seen to validate their efforts as important contributions to ritual and tradition. From these *mikoshi* parades, we conclude that today's *mikoshi* parades are characterized by sanctification by organization committees as they try to maintain their administrative control. In this process, the concepts of tradition, ritual, and intangible cultural heritage are often invoked. Thus, festivals in contemporary Japan have not only changed from rituals to events but also from events to traditions.

キーワード：祭礼　神輿　三社祭　神聖化　イベントから「伝統」へ

* 関西学院大学大学院社会学研究科

Copyright © 2020 by The Society of Living Folklore

1. 問題の所在

本論文は、東京圏[1] の神輿渡御・神輿パレードにおける主催者と参加者とのせめぎ合い、すなわち文化政治を描き出すものである。

東京圏では、今日においても神輿渡御・神輿パレードが活発に行われている。本論文のいう神輿渡御とは、神社の神幸祭において町会神輿や本社神輿が担がれる行為を、神輿パレードとは、神社の神幸祭ではない場面において、目的を達成するための手段として神輿が担がれる行為をさす。神輿渡御、そして一部の神輿パレードは、神事、すなわち神霊を神の乗り物である神輿に一時的に乗せる御霊入れ神事をとおして、神が乗せられた神輿を担ぐ儀礼的行為である一方で、担ぎ手に楽しみを与え、主催者や警察にも管理不可能な熱狂を生み出す祝祭的行為でもある[2]。

このような東京圏の神輿渡御・神輿パレードにおける神輿の担ぎ手は、町会つまり氏子たちを中心とした地縁的共同体の成員と、かれらの知人だけではない。担ぎ手の一部は、神輿会[3] と総称可能な神輿担ぎの同好会によって占められている。2013 年に神田祭の町会に対する包括的な調査を行った秋野淳一によると、把握できただけで 56 町会・連合会中、41 町会・連合会に神輿会の参加がみられたという［秋野 2018: 197］。また三隅貴史が行った Web サイトの分析によると、神輿会は東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県に 900 団体以上存在する［三隅 2020］。そしてそれらの神輿会は、それぞれ年に 5 回から 40 回ほど、神輿渡御・神輿パレードに参加し、神輿を担いでいる。

神輿会の成員は、祭礼当日を中心に町会に集まる、地域住民と氏神を共有しない祭礼への参加者だ。かれらが神輿を担ぐ理由は、崇敬者だからというよりも、神輿担ぎを趣味としているからである。このように氏神を共有せず、趣味として神輿担ぎを楽しむ参加者が参加している現代の神輿渡御をどのように分析できるだろうか。2 章で詳述するが、先行研究は現代の祭礼をイベント化という概念で捉え、神事が縮小し、イベントが拡大したものとして分析してきた。

にもかかわらず、東京圏の神輿渡御・神輿パレードにおいては、しばしば神や伝統が強調される場面が散見される。まず神輿会は、しばしば神や伝統のために活動する集団として自らを語る。たとえばある神輿会の連合団体は、「日本の伝統文化である「神輿道」継承の為」［日本神輿協会アカデミー編 2010: 1］に活動しているという。神輿道という語りは、他の神輿会においてもしばしばみられるものだ。そして祭礼の場では主催者によって、神輿渡御が「神事たる御祭礼である」［浅草神社・浅草神社奉賛会 2008］ことが強調される。さらに神幸祭とは関係のない神輿パレードにおいても、神輿に御霊が入れられる場面が散見される。このような一見矛盾する現代の神輿渡御・神輿パレードを、いったいどのように分析すればよいのだろうか。

本論文の目的は、現代東京の神輿渡御・神輿パレードにおける神事のありようとはどのようなものかという問いに答えること、そしてこの問いに答えることをとおして、柳田國男の理論「祭から祭礼へ」［柳田 1998（1942）: 377］のその後を考察することにある。

2. 先行研究の検討と本論文の分析視角

（1）先行研究の検討

祭りや祭礼がある時代の社会的環境の中でどのように変化してきたのかを分析する宗教学・民俗学的関心において重要な視角とされてきたのが、柳田の理論である。柳田は祭から祭礼へという言葉を用い、信仰を共にしない見物人が発生したことによって、祭は華美な要素が拡大し、忌み籠りが縮小した行為、祭礼になったと論じた。ここで柳田が注目している社会的環境とは、近世における都市化の進行にともなう観光化や世俗化である［柳田 1998（1942）: 381-384］。

その後の民俗学者たちは柳田の理論をふまえ、柳田のいう祭礼からさらに華美な要素の拡大と忌み籠りの縮小が進行していることを指摘した。この傾向を指摘する研究を、イベント化論と総称できる。松平誠は、祭礼における担い手の間での神への意識の喪失を「祭礼からイベントへの「進化」」［松平 2008: 192］として、柳田の理論に続く形で提示した。松平のいうイベントとは、町内だけにとどまらない担い手が、神に見せるために行うのではなく見る人に対して見せるために行う行為をさす［同 : 192-199］。この変化において松平が注目している社会的環境とは、高度経済成長以降の産業化の進行にともなう、さらなる観光化や個人化、世俗化である［同 : 20-24］。

一方で近年の研究では、東京圏と同様に祭礼やイベントの中で神事や伝統が強調・創造される事例が報告されている。ここでは仮に、これらの研究群を神事化研究と名付けておこう［芦田 2001; 菅井 2015（神事化という呼称はこの論文にもとづく）; 矢島 2015: 60; 阿南 2016: 318-323; 335-344; 及川 2017: 261-272］。なぜ神事化という現象が生じているのかという問いに対しては、菅井冴織と矢島妙子、及川祥平の研究はイベントにおける顧客満足度の向上という徹底した観光化[(4)]、芦田徹郎と阿南透の研究は、秩序化、つまり秩序と混沌とが混淆している祭礼という行為を秩序あるものにしようとする社会的環境に注目しているといえるだろう。

さてイベント化論、そして神事化研究の視角から東京圏の現状を分析すると、どのような指摘が可能だろうか。東京圏の神輿渡御・神輿パレードにおいて神事が強調・創造されている現象に対して、イベント化論から十分な分析を行うことは困難である。なぜならイベント化論は、神事からイベントへという変化を不可逆なものと捉える傾向があるからだ[(5)]。この指摘をふまえ本論文では、象徴人類学・宗教社会学などの先行研究でもちいられてきた形式性（formality）と乱痴気騒ぎ（masquerade）、儀礼性（rituality）と祝祭性（festivity）［前者は、リーチ 1990（1961）; 後者は、芦田 2001 など］という用語の複数の含意を、神が意識されているか、されていないかという神事－イベント軸と、その場が権威的立場によって管理可能か、管理不可能かという秩序－混沌軸の 2 つの軸に区別する。その上で、祭礼においてこれらの要素が併存するものであること、そして一方向に展開するものではなく、2 つの間で揺れ動くものであることを前提とする。

一方で神事化研究は、イベント化論と自らの事例との関係性について十分な説明を試みてこなかった。この点の精緻化をとおして、イベント化論に対して知見を加えていく必要があろう。

（2）本論文の分析視角と対象設定

筆者は、先行研究や東京圏の祭礼・イベントにおいてみられる神事化現象を、主催者と参加者

とのせめぎ合いの結果として分析する。この視角は、秩序化という社会的環境の中でのアクター間の対抗を議論してきた対抗論の蓄積に影響を受けたものである。

対抗論とは、祭礼で生じる対抗現象を研究対象とする研究群の総称である。対抗論の代表的な主張者である芦田は、過剰な力を有する祭りと、その力を管理した上で地域社会の再生などの手段として活用を試みる主催者との対抗関係について論じた［芦田 2001: 135-136］。秩序化と祭礼の有する混沌との対抗関係から現代の祭礼のありようを明らかにしようとする問題意識にもとづいた研究は、祭りの儀礼性が日常的秩序と結び付き、過剰な祝祭性を挟撃し、封じ込めようとしているという祝祭の封じ込め仮説［同 : 34］、自らが望む祭礼をぶつけ合い、競い合う場として祭礼を把握する分析視角［中里 2010: 147］、祭りが管理・予測可能な暴力にもとづき、能力を基準に選抜された担い手が楽しみのために参加する行為、つまりスポーツ化したという知見［有本 2017: 67-68］などを生み出してきた。

本論文はこのような対抗論の蓄積にもとづいた上で、東京圏の神輿渡御・神輿パレードにおける権威的立場の人びとと参加者とのせめぎ合いに注目する。本論文のいう権威的立場の人びととは、祭礼やイベントを自分のものとして設計することが可能な主催者をさし、参加者とは、かれらによる支配的メッセージを受容する人びとのことをさす。

主催者と参加者とのせめぎ合いに注目する上で重要なのが、参加者が単に主催者による支配的メッセージを受け入れるだけではなく、能動的な受容を行う可能性に開かれていることだ。このことにかんしては、S. ホールがエンコーディング／デコーディング論において提示した 3 つの仮説的立場が参考になる。ホールは、送り手による支配的メッセージに対して、受け手は多様な立場からの解釈が可能なことについて、①支配的－ヘゲモニー的な立場：支配的メッセージをそのまま受け入れる立場、②交渉的な立場:支配的メッセージを採用したり抵抗したりするものの、大筋で受け入れる立場、③対抗的な立場：支配的メッセージを認識し、それに対抗する立場という 3 種類から説明した［Hall 1996（1980）: 136-138］。ホールの類型からもわかるとおり、主催者による支配的メッセージは、参加者にそのまま受け入れられる可能性もあれば、対抗的な立場から反発される可能性もある。以下では、神輿担ぎにおいて一定の秩序を望む主催者(6) と、混沌とした状態に楽しみをみいだし、支配的メッセージを多様な立場から解釈する参加者という不均衡な力関係の間でのせめぎ合いを文化政治(7) と称し、そのありようを分析していく。

本論文では、東京都台東区で実施されている三社祭（さんじゃまつり）の宮出しと、東京都千代田区および、港区・渋谷区で実施されている 2 種類の神輿パレードを事例として取り上げる。これらの事例中に登場する神輿の担ぎ手は、その多くが町会の成員ではなく神輿会の成員である。なお本論文で利用したデータは、主催者等が公表した文書および、三社祭（2015-19 年）、建国記念の日奉祝パレード（18, 19 年）・天長節奉祝祭神輿パレード（18 年）に対する参与観察と聞き取り調査、およびそれ以外の場における聞き取り調査（15 年 5 月から 19 年 9 月）の結果によって得られたものである。

3. 戦後三社祭における政治

（1）三社祭の概要

三社祭は、土師真中知命（はじのまつちのみこと）・檜前浜成命（ひのくまのはまなりのみこと）・檜前竹成命（ひのくまのたけなりのみこと）を祀る浅草神社の大祭である。毎年 5

月 18 日に最も近い土・日曜日を中心に開催される。現在の三社祭は、東京圏に複数分布している神輿祭礼を象徴する荒々しい祭礼であると認識されており、2019 年の三社祭は 198 万人の人出を集めた［浅草神社奉賛会 2019］。しかしながら岡本亮輔が指摘しているように、三社祭はかならずしも戦前から「江戸神輿の象徴」という地位を占めていたわけではなかった［岡本 2018］。

浅草神社奉賛会のホームページと筆者の参与観察をもとに、19 年の三社祭の日程について簡単に述べておきたい。木曜日には本社神輿（ほんしゃみこし）御霊入れの儀が、金曜日には大行列が行われる。また土曜日には式典の後、44 ヶ町の町会神輿が浅草神社を訪れる町内神輿連合渡御が行われる。そして日曜日には、神幸祭が行われる。まず午前 6 時に、一之宮・二之宮・三之宮の 3 基の本社神輿が境内から担ぎ出され、最初の町会へと受け渡される宮出しが行われる。この宮出しは、氏子以外を含めて 1 万人ほどの担ぎ手を集める三社祭最大の見せ場だとされている。その後 3 基の本社神輿は、南部・東部・西部という 3 方面に分かれ、所属するそれぞれの町会にリレー形式で受け渡されていく。そして夕方には、各方面のすべての町会を巡った本社神輿が、浅草神社の境内に還御する宮入りが行われる［浅草神社奉賛会 2019］。

以下では、戦後三社祭の歴史を 4 つの時代に分割した上で、それぞれの時代において特筆すべき話題を取り上げながら、どのように混沌が拡大し、それがどのように管理され、一定の秩序をみせるに至ったのかについて論じていく[(8)]。

（2）復興と「どん底の時代」（1948 年から 70 年ごろまで）

第二次世界大戦にて、浅草寺の観音堂や市街地が焼失するなどの被害を受けた浅草では、1948 年から三社祭が再開された。そして 50 年と 53 年に、本社神輿 3 基が再建された［住吉 2016: 66］。このような取り組みからも分かるとおり、戦後一時期は三社祭が活発に行われた。

しかし 50 年代後半から 70 年ごろまで、過去には盛り場としての繁栄をみせていた浅草が「どん底の時代」［同 : 168］を迎える。三社祭もまた、浅草の衰退にともなって盛り上がりに欠ける時代に直面した。新聞報道における三社祭への来場者数をまとめたのが表 1 だ[(9)]。56 年は町会神輿連合渡御の日に 20 万人を集めたが、69 年は総計 17 万 5 千人、70 年は総計 20 万人と振るわない。

三社祭西部方面の A 町会で神輿渡御に参加していた町会成員 A（60 代男性）は、60 年代の町会と三社祭について次のように語る。A 町会は 60 年代前半まで、砂糖菓子の製造を行う零細企業が集積した地域であり、使用人を抱える旦那が多く居住していた。そのため三社祭の日には、使用人に神輿を担がせることで賑やかな三社祭が達成されていた。しかし 60 年代半ばにかけて、すべての店が廃業していった。その中で使用人は解雇され、旦那たちの子どもは地域外で就職していく。そしてこれが原因で担ぎ手も不足することになった。当時の浅草の状況に対して A は、「子どもながらに浅草全体から人がいなくなっているような感覚を覚えた」と語る。

（3）浅草ブームの時代（1970 年代前半から 90 年代前半まで）

表 1 からも分かるとおり、1970 年ごろまで多くの来場者を集めていなかった三社祭において、71,72 年ごろからは来場者数の増加傾向がみられる。さらに 74 年ごろからは、より顕著な増加傾向がみられる。そして極め付けは、78 年から 82 年までの人出であろう。三社祭への来場者数の増加傾向は、70 年代半ばからの「下町」の再評価、そしてその環境の中での 78 年の連続テレビ

表１　新聞報道における三社祭来場者数

No.	記事見出し	新聞社	発行年月日	対象年	来場者数	対象日
1	江戸の華やかさ	読売新聞	1956.5.18 朝刊	1956 年	20 万人	町内神輿連合渡御の日
2	“江戸の夏”へ 4 万人	読売新聞	1967.5.20 夕刊	1967 年	4 万人	町内神輿連合渡御の日
3	ゆかた姿も涼しく	朝日新聞	1970.5.17 朝刊	1970 年	4 万人	町内神輿連合渡御の日
4	祭りだワッショイ	読売新聞	1971.5.18 朝刊	1969 年	17 万 5 千人	総計
				1970 年	20 万人	総計
				1971 年	30 万人	総計
5	おまつり広場 40 万人	読売新聞	1973.5.21 朝刊	1972 年	37 万人	不明
				1973 年	40 万人	本社神輿渡御の日
6	浅草ワッショイ	読売新聞	1975.5.19 朝刊	1974 年	90 万人	総計
				1975 年	83 万 3 千人	本社神輿渡御の日
				1975 年	100 万 8 千人	総計
7	ワッショイ 93 万人	読売新聞	1976.5.17 朝刊	1976 年	93 万人	本社神輿渡御の日
8	東京の風俗この 1 年	読売新聞	1978.12.26 朝刊	1978 年	190 万人	総計
9	「三社祭」どっと 200 万人	読売新聞	1979.5.21 朝刊	1979 年	200 万人	不明
10	下町熱気のフィナーレ	読売新聞	1980.5.19 朝刊	1980 年	190 万人	本社神輿渡御の日
				1980 年	220 万人	総計
11	浅草・三社祭に 285 万人	読売新聞	1982.5.17 朝刊	1982 年	285 万人	総計
12	東も西も祭りに酔う	読売新聞	1983.5.16 朝刊	1983 年	203 万人	総計
13	燃えた！江戸の華	朝日新聞	1985.5.20 朝刊	1985 年	165 万人	本社神輿渡御の日

『読売新聞』・『朝日新聞』をもとに筆者作成。
注記①：上記の数字には「昨年を〇万人上回る」などの記述を、筆者が独自に計算したものも含まれている。
注記②：「約」・「ざっと」などの副詞は省略している。また振れ幅のある数字の場合は、平均値を記載している。

小説『おていちゃん』が人気を博したことにともなう、浅草ブームと関係したものであった。

浅草ブームを追い風とする形で、79 年からは浅草にて「江戸神輿大会」という神輿パレードが実施されている(10)。「江戸神輿」を称するイベントが、三社祭の町会神輿 5 基の出演とともに浅草で行われたことは、浅草のイメージ向上を図る主催者の意図と、「江戸神輿」の代表を名乗ることに有無をいわせないこの時代の三社祭の人気との双方を感じさせる。これらをとおして三社祭は、この時代に「江戸神輿の象徴」という認識を確立してきたのである。

多くの来場者と地域外からの神輿会の担ぎ手を集めるに至った三社祭宮出しにおいて、70 年代後半から 80 年代半ばまでは 1 つの転機であった。この時代から、宮出しにおいて混沌とした側面が大きく拡大していったのである。この時代からの混沌の拡大は、組織化と商品化という 2 点において、過去からの連続とは異なる。すなわち組織化とは、個人や 1 つの神輿会同士が棒を奪い合うのではなく、複数の神輿会が集結した 100 人以上の集団同士の喧嘩で神輿の棒を奪い合うことが多くなった傾向をさし、商品化とは、大きな勢力を有し、毎年担ぐことができている会が、神輿を担ぐことができる権利、あるいは神輿乗りの権利の販売を始めたことをさす。

この時代から加熱したのが、三社祭の宮出しにおいて神輿を担ぐこと、そして神輿乗り、すなわち神輿の棒の上に乗り、扇子や手で担ぎ手を差配する所作をみせる表現をめぐる混沌の拡大である。まず、神輿を担ぐことをめぐる実践について論じよう。77 年［朝日新聞社会部東部支局編 1986: 47］には、神輿会の成員が多くなった宮出しにおいて、氏子が宮出しで神輿を担げるようにすることを目的として、ワッペン制度、つまり事前に町会等にワッペンを配布し、そのワッペンをつけている担ぎ手以外の入場を禁止する制度が開始される。しかしワッペン制度は、ワッペンの偽造と商品化に直面した。浅草警察署の発表では、2001 年の宮出しには、3,300 枚しかワッ

ペンが存在しないにもかかわらず、13490 人もの担ぎ手が入場したという［浅草警察署警備課長 2002］。このようにワッペン制度は目的を達成できず、01 年を最後に廃止された。

次に、神輿乗りをめぐる実践について論じよう。西部方面の B 町会出身であり、1971 年に B 神輿会を設立した B（60 代男性）によると、神輿乗りという表現は 50 年代には鳶によってすでに行われていたという。かれらは神輿に乗り、神輿の上で美しい技を見せ、障害物を監視することで、安全かつ見物人を沸かせる渡御を実現した。鳶は 81 年ごろまで合力半纏という特殊な半纏を着用した上で神輿に乗っていたという。しかし 82 年ごろには、鳶を含むすべての参加者の神輿乗り禁止が宣言された。そして鳶頭と神社・奉賛会との話し合いの上で、鳶による神輿乗りは公式的には行われなくなった。一方で遅くとも 60 年代後半には、鳶の真似をして非公式に神輿に乗る担ぎ手が出現したという。担ぎ手や来場者の注目を集め、自らの権威を誇示することができるこの表現は、多くの参加者に模倣され、最も格好良い表現として 2007 年まで続けられた。

奉賛会は、神輿乗りをやめさせるための対策を講じてきた。84 年には、神輿乗りを妨害するために担ぎ棒の上部に三角形の鉄板が取り付けられた［朝日新聞社会部東部支局編 1986: 62］。しかしこれもまた「痛かったけど、あれ（鉄板―筆者註）がある方が乗りやすかったという人もいた」（宮出しで棒を持つ台東区 C 神輿会の成員、40 代男性）と語られており、決定的な打撃にはならなかった。また神輿乗りに対しては、84 年ごろから[11] 東京都のいわゆる迷惑防止条例に違反する行為として法的取締がなされるようになった。しかし神輿乗りの現行犯逮捕を試みる警察官は、しばしば担ぎ手の反撃に合い、神輿の周囲にたどり着けないことも多かった。

（4）「戦国時代」（1990 年代半ばから 2007 年まで）

1980 年代から 2007 年までの三社祭は、主催者にとって管理不可能な時代が続いた。中でもそれが著しかったのは、1990 年代半ばから 2007 年までの時代である。この時代は、宮出しを担いでいた神輿会の間で「戦国時代」（C 神輿会の成員、40 代男性）と語られる。この時代の混沌の拡大は、1970 年代後半からの組織化と商品化が徹底して進展する形でもたらされたといってよい。その方面の本社神輿のある場所を去年担いだという実績によって、その場所を担ぐ権利を持つとされる神輿会が漠然と決定しながらも、それに賛同しない神輿会が決定を覆すために実績を持つ神輿会に挑戦するという行為の応酬が、100 人以上の集団同士の決闘を生じさせたのである。喧嘩に勝利するために集められた神輿会の成員には、「どれだけ人を殴っても良いと聞いた」（C 神輿会の成員、40 代男性）というように、喧嘩を目的として参加した人も珍しくなかった。実際に C 神輿会は宮出しに備えて、成員の兄弟や同級生などに声をかけ、神輿に興味がない人を含めた頭数を集めたという。そしてこの時代の担ぎ手の多くは、喧嘩での勝利以外をかならずしも強く意識してはいなかった。C 神輿会の成員（30 代男性）によると、この時代の宮出しでは、境内でレインコートを脱ぎ捨てる、格闘家を雇う、武器を持ち込む、担ぎ手がかぶるための水などを神輿に乗せるなどの行為が珍しくなかった。

そのような中で宮出しが秩序へと向かうきっかけとなったのが、2006 年の「棒折れ事件」、07 年の「3 の 2 事件」である。棒折れ事件とは、06 年の宮出しにおいて多くの人が神輿乗りをしたことによって、二之宮の神輿の横棒（トンボ）が折れた事件をさす。棒折れ事件に対して、神社と奉賛会は、「前代未聞の深刻な不祥事」、「今後の浅草神社例大祭に於いては二度と繰り返されてはならない」との声明と、すべての者の本社神輿渡御中の神輿乗りを禁止し、違反した場合に宮出し・宮入りの中止や、翌年の朱引からの削除を検討するという旨の「定め」［浅草神社・浅

草神社奉賛会 2006a］を発表した。これらの通達は、神輿会に容易に受け入れられたわけではなかった。しかし神輿会の中で、宮出しで棒を持っている会の代表に注意事項を伝達するための連絡組織である「三社祭宮出し連絡評議会」（B）が発足し、上記の定めを含む誓約書への署名がなされた。これをきっかけとして、07 年の本社神輿渡御は開催される運びになった。

こういった環境の中で年明けには、評議会に所属する神輿会の間で、前 3 人、後ろ 2 人までなら神輿に乗ってもよいと会議で決まったとの情報が広がり始めた。これに対して神社と奉賛会は、これらの情報を否定し、すでに通達しているとおり神輿乗りは絶対に許されない旨をふたたび通知した。このように 07 年の宮出しは、複数の情報が錯綜する中で開催されることとなった。

そのような中で 3 の 2 事件が生じた。3 の 2 事件とは、事前の前 3 人、後ろ 2 人までは乗ってよいとする「密約」（B）の存在と、宮出しの場で鳶頭が行ったハンドサイン（右手で 2 本の指、左手で 3 本の指を立てた行為）の解釈をめぐる、奉賛会（主催者）と評議会（参加者）の対立をさす。主催者は、「密約」やハンドサインは存在せず、通達書にしたがって翌年の本社神輿渡御を中止すると主張した。一方参加者は、「密約」を守り、一度に 5 人しか神輿乗りを行わなかったにもかかわらず、本社神輿渡御の中止は不当だと主張した。結局、神社と奉賛会は翌年 08 年の本社神輿渡御の中止を発表し、08 年は本社神輿渡御が実施されなかった。

（5）健全化の時代（2008 年から現在）

興味深いことに、2006 年から 08 年にかけて神社と奉賛会が公表した資料には、三社祭が神事や伝統であること強調する言説、たとえば「神聖な神輿」［浅草神社･浅草神社奉賛会 2006b］、「浅草神社の例大祭が輝かしい伝統を誇り、神事たる御祭礼である事」［浅草神社・浅草神社奉賛会 2008］が頻出する。頻出の理由としては、主催者である神社と奉賛会が神事や伝統を強調することによって、三社祭を秩序化しようとする戦略をとったからと分析できる。では参加者は、この支配的メッセージをどのような立場から解釈したのだろうか。

まず評議会は、08 年の中止を受けた結果、09 年以降の神輿乗りを禁止することで同意した。そして宮出しの中止は、「それまでは何をしてもよいという風潮があった」（C 神輿会の成員、40 代男性）と語られているように、参加者に大きな影響を与えた。この時代以降、今まで神輿に乗っていた神輿会の成員は、神輿に乗ることに対して「神様にケツを向けるなんて」（同）というように、神と関係させた形で行為を非難する語りをみせるようになった。

一方で参加者の間では、主催者による支配的メッセージへの対抗的な立場からの解釈もしばしばみられた。たとえば過去の宮出しを知る神輿会の成員は、「昔の三社は良かった」と、あるいは、中止後の確固とした担ぐ場所の決定を「談合」（C 神輿会の成員、40 代男性）と非難し、昔を懐かしんでいる。また三社祭における刺青を入れた参加者の写真と、宮出しの参加団体に対する取材記事が掲載された大衆誌では、東京都区部育ちで「不良文化」の実践者であった塚原晃が、神輿乗りの禁止に対して「神輿は神様の乗り物、下賤な人間が乗るのは無礼と、訳知りみたいな人が叫んで中止されちまったらしい」、「これじゃあ近い将来、しずしずと行儀良くつらなって運ぶ、神輿のパレードになり果てるんじゃあないだろうか」［塚原 2012: 29］と痛烈に批判している。

これらの多くが現状への嘆きにとどまっていることからもわかるとおり、神事や伝統の強調という支配的メッセージは参加者に大筋で受け入れられた。その結果として、三社祭は一定の落ち着きをみせていった。神輿乗りの禁止以外にも、参加者による秩序への貢献と混沌の否定、たとえば宮出し終了後の境内の清掃や、日の丸と「がんばろう日本！」が描かれたシールの装着など

が行われていった。この後は、12 年にふたたび神輿乗りがみられたものの、それらが罰されたのちは本社神輿への神輿乗りがみられなくなり、今日に至っている。

以上で述べてきたように三社祭においては、1970 年代以降の世俗化や観光化が生み出した混沌の拡大に対する揺り戻しとして、神事や伝統を強調する言説が生じ、それが参加者に大筋で受け入れられた結果、現在は一定程度の秩序が成立している。

4. 神輿パレードにおける政治

（1）東京圏における神輿パレードの概要

東京圏では、1970 年代の神輿会の拡大にともない、この時期以降に神輿パレードが活発に行われるに至ったと考えられる。神幸祭にともなう神輿渡御とは異なり、神輿パレードをわざわざ開催し、維持することには目的が必要だ。では主催者は、神輿パレードを開催することをとおして何を達成しようとしているのだろうか。

本論文では東京圏の神輿パレードを、その目的にもとづき①地域振興系、②奉祝系、③交流系の 3 種類に類型化したい。地域振興系は、自治体や地域団体が主催するもので、地域の賑わいの演出と地域への愛着の涵養に重点を置く。奉祝系は、政治・宗教団体が主催するもので、日本の伝統の演出に重点を置く。そして交流系は、神輿会の連合会が主催するもので、連合に所属する神輿会同士の交流やレクリエーションに重点を置くものだ。管見では地域振興系が、東京圏の神輿パレードの半数以上を占めているといってよい。神輿パレードにおける神輿と担ぎ手の多くは、意思決定が比較的困難な町会の神輿と成員から動員されるのではなく、特定の神社や地域と強い関係を持たず、意思決定が比較的容易な神輿会の神輿と成員からより多く動員される。

東京圏において神輿パレードが好まれている最大の理由は、上記の目的を達成するためのモノや担い手を省労力・省費用の上で集めることができる点にあるように筆者には思われる。省労力とは、当日神輿を出すホストの集団が自発的に友好団体を集めてパレードを成立させるため、人手集めにおける主催者の手間が少ないこと、省費用とは、神輿の準備や趣味で神輿を担ぐ担ぎ手の動員に謝金が支払われないことをさす。主催者にとって、担ぎ手の大部分を占める神輿会の成員は、安価に集められる上、賑わいを演出してくれるありがたい存在といえるかもしれない。

しかし参加者たちと神輿パレードという行為は、前述の目的に対して不足や過剰を、とくに、求められる賑やかさよりもより過剰な「賑やかさ」を有している。そして後述するように、かれらが有する過剰な「賑やかさ」は、神輿パレードにおいても複数の事件を引き起こしてきた。では神輿パレードにおいては、どのような政治がみられるのだろうか。

（2）地域振興系神輿パレードにおける政治

現代の東京圏は、地域商店の活性化やコミュニティの創出など、さまざまな課題を抱えているとされる［東京都都市計画審議会 2016］。前述のとおり、このような課題の解決を目的として自治体まつりが開催されており、主要な賑やかしとして神輿パレードが実施されている(12)。

では神輿会の成員は、主催者による支配的メッセージをどのような立場から解釈しているのだろうか。興味深いのは、「神輿とはそもそも神様の乗る輿であるのに最近、単なる商店祭に利用

されがちなのはおかしいのではないか」［東京情報編集部編 1978: 13］という語りに代表されるように、神輿会の成員が神幸祭にともなう神輿渡御とそうではない神輿パレードとの差異にこだわりを有し、後者を重要視していない点である。実際にC神輿会の成員の間でも、イベントへの参加にかんしては、「これは遊びだから」、「神様いないからね」（40代男性）と語られている。

そしてC神輿会の成員によると、イベントの方が祭礼よりも喧嘩が生じやすいという。参加者同士の喧嘩に対する主催者の対策として多くみられるのは、喧嘩を起こした神輿会を数年間出入り禁止にする対策だ。しかし自治体まつりでは、このような行為に直面した結果、翌年以降神輿パレードを取りやめた事例が散見される。C神輿会の成員によると、国分寺まつりは2010年を最後に神輿パレードが中止になったという。そしてこの理由は、飲酒していた参加者同士の喧嘩が頻発していたから、そして担がれた神輿が観客と接触する事故を起こしたからだという。この事例からは参加者の多くが、神なき神輿パレードにおける支配的メッセージを、対抗的な立場から解釈していることがわかる。結果として主催者は、参加者による地域の賑わいづくりよりも過剰な「賑わい」が生じることの管理にかならずしも成功してこなかったといえよう。

（3）奉祝系神輿パレードにおける政治

政治・宗教団体が主催する奉祝系神輿パレードにおいても同様に、しばしば過剰な混沌が問題視されてきた。しかし奉祝系神輿パレードでは、主催者が御霊入れ神事を行うことで、これらの管理を試みている。神輿パレードの神事化を論じる上で興味深い事例であるため、以下では建国記念の日神輿パレードと天長節奉祝祭という2つの事例を取り上げよう。

建国記念の日神輿パレードは、「日本の建国を祝う会」が実施しており、「日本文化興隆財団」や「東京都神道青年会」などが行事に協力している。建国記念の日の神輿パレードは、遅くとも1976年［東京情報編集部編 1978: 13］ごろには、「建国記念の日奉祝会」と「日本を守る会」によって開催されている。88年からは主催者が、神武天皇による建国の意義の明確化と政府主催式典の開催を主張する日本の建国を祝う会となった(13)。2019年には、表参道から明治神宮本殿前までの区間において10基以上の会神輿などを利用した神輿パレードが実施されている。

このような建国記念の日神輿パレードでは、17年に参加者による明治神宮境内でのタバコのポイ捨てや立ち小便、表参道の商店への立ち入りや路上での飲酒などが問題視され、来年以降の開催が危ぶまれることになった。そのため18, 19年に行われた神輿パレードにおいては、「奉祝行事に相応しい、表参道近隣の皆様、明治神宮参拝の皆様に愛されるパレード」［日本の建国を祝う会 2019］を目指すことを目的として、上記の問題視された行為の禁止などに対して参加同意書への署名が求められた。また表参道においては、GUCCI前の仮設祭壇にて「御霊入れ神事」（主催者の語り）が行われ、それぞれの神輿に御霊が入れられた。そして出発前の式典では、参加同意書に記載されている注意事項の遵守が再び呼びかけられたほか、参議院議員が参加者に対して「神輿を担いで日本の伝統を守ってくれている皆様」と呼びかけ、盛大なパレードを実施するよう依頼した(14)。以上のような、奉祝行事に相応しいパレードを目指そうとする主催者による支配的メッセージの発信が功を奏したのか、18,19年の建国記念の日神輿パレードにおいては存続が危ぶまれる事態は生じなかった。

建国記念の日神輿パレードでの戦略を参考にしたと思われるのが、「天長節奉祝祭実行委員会」の主催で18年12月に代々木公園周辺で行われた天長節奉祝祭神輿パレードである。筆者の観察では、利用されている道具や参加している団体などの複数の部分において、建国記念の日神輿パ

レードと共通する部分がみられた。主催者が「自治体や町会による祭礼やパレード」ではなく「あくまで奉祝活動」であり、「安全かつ厳粛に奉祝活動を企画してまいります」［天長節奉祝祭実行委員会 2018］と明記している本パレードにおいては、10 基程度の神輿が担がれ、祝田橋交差点では担ぎ手が天皇陛下万歳を三唱するなど、さまざまな取り組みが行われた。

この神輿パレードにおいて興味深い点は、開会の式典において長い時間を割いて神事を行った点にある。ステージに祭壇を設け、「お祓い、祝詞奏上、神輿への御霊入れ」［同］を行うことについて主催者は、「参加者は楽しむことはもちろんのこと、神事をもって臨むことで、日本における最高位の神官でもある天皇陛下への感謝をより厳粛にお伝えしてまいります」［同］と説明している。実際に当日は、40 分ほどの神事が行われ、次に 35 分ほど政治団体役員の挨拶や祝電の読み上げが行われた上で、神輿パレードが開始された。管見では当日の神輿パレードにおいて、少数の喧嘩がみられた以外は、主催者が問題視している行為が生じることはなかった。

このような奉祝系神輿パレードにおける主催者による支配的メッセージを、担ぎ手である神輿会はどのような立場から解釈しているのだろうか。神輿会の成員は建国記念の日神輿パレードに参加することに対して、「2 月という祭りがない時期に神輿を楽しむ良い機会」、「右翼なわけじゃない」（世田谷区 D 神輿会の成員、70 代男性）、「新年の挨拶の場」（C 神輿会の協力団体、三多摩地域 E 神輿会の成員、40 代男性）と語る。また成員は、御霊入れ神事を行っていることに対しても「（神輿が―筆者註）寄せ集めだしやっぱり地元の祭りって感じじゃないよね」、「イベントでしょ？」（E 神輿会の成員、40 代男性）と語り、奉祝系神輿パレードをイベントとして認識している。さらに天長節奉祝祭の神事と来賓の挨拶の際には、途中で離席し喫煙する成員が多くみられたほか、来賓の挨拶の長さに対して批判的な言葉が投げかけられた。

その一方で、御霊入れ神事を喜ぶ成員の姿もみられた。神輿に御霊入れ神事が行われた際には、成員は嬉々としてスマートフォンで写真を撮影し、「今日はただのイベントじゃないよ！」（C 神輿会の成員、30 代男性）、「いい記念になったね」（E 神輿会の成員、30 代女性）と語った。

神輿会の成員が御霊入れ神事を歓迎する姿勢からわかることは、成員が自らの実践に対して高尚な意味を与えることを望んでいるということだ。つまりこれらの姿勢は、自らの活動がただの大騒ぎなのではなく、神や伝統、日本に奉仕するという高尚な意味を有することを表明したいものと分析できる。これまで論じてきた、担ぎ手による神輿乗りへの非難、日本の伝統文化、神輿道、「がんばろう日本！」の強調などもまた、これと同様であろう。

（4）まとめ―祭礼の神聖化―

以上の事例において神輿パレードの主催者は、神輿パレードに高尚な意味を与えることで、神輿会と神輿パレードの管理を試みている。そして神輿会は、その取り組みを一定程度歓迎している。D. ハイムズは、ある事象を伝統化しようとする実践が、人間一般の欲求にもとづくものであることを指摘した上で、その結果を批判的に分析することの重要性にふれている［Hymes 1975: 354］。ここからは参加者の側にもまた、主催者による神事や伝統を強調する戦略に対して、親和的な欲求があることを指摘できるだろう。

つまり主催者は、神輿会の高尚な意味への欲求を理解した上で大々的な御霊入れ神事を行う。これをとおして主催者は、神輿会の活動に高尚な意味を与え、神輿会を模範的な日本の伝統の守り手としてふるまわせようとする。そして神輿会の成員は、主催者の取り組みに満足した上で、主催者の意図から大きく逸脱しない交渉的な立場からの解釈にもとづき、賑やかでかつ秩序だっ

たパレードを行う。このようにして奉祝系神輿パレードでは、秩序が達成されているのだ。

以上の主催者による神事や伝統を強調する戦略を、祭礼の神聖化と称することが可能だろう。筆者がここで、神事化研究と異なる神聖化という言葉を用いる理由は、単に参加者の楽しみのために祭礼に神事や伝統が創造されているというだけではなく、祭礼を神聖でおかしがたいものとするために神事や伝統が創造されているという戦略的な側面を強調するためである。祭礼の神聖化とは、祭礼の高尚な意味を強調する言説によって、祭礼の混沌を縮小させ、秩序を達成しようとする戦略をさす。そして高尚な意味を強調する言説とは、祭礼が神事、伝統、芸術、文化財、文化遺産などであることを強調する言説のことだ。

本論文のいう神聖化を、神事－イベント軸と秩序－混沌軸の 2 軸から説明するとすれば、秩序－混沌軸における過剰な混沌に対して、神事－イベント軸における神事を復活させることで、秩序－混沌軸において秩序を達成しようとする戦略として説明できる。この戦略において祭礼は、「賑やかさ」を超えて日常的秩序を混乱させることは求められていないのである。

5. 結論―イベントから「伝統」へ―

以上の事例をもとに、現代東京の神輿渡御・神輿パレードにおける神事のありようとはどのようなものかという問いに立ち返ろう。まず現代の三社祭や奉祝系神輿パレードでは、神事や伝統が強調・創造されていることを指摘できる。三社祭や奉祝系神輿パレードにおける神事や伝統の強調・創造は、それによって混沌を縮小し、秩序を達成しようとする主催者と、より高尚な意味を持つ行為に参加したい参加者による交渉的な解釈の双方に起因するものであった。つまり神事や伝統の強調・創造は、主催者による神聖化戦略の側面と、参加者による戦略の交渉的な立場からの解釈の側面との両面によって達成されているといえるだろう。

ではここから、神事からイベントへという変化を主張するイベント化論に対して、どのような知見を加えることが可能だろうか。1970 年代以降の東京圏の神輿渡御・神輿パレードでは、イベント化論が指摘するように、観光化や世俗化にともなって、神事からイベントへ、あるいは一定の秩序から混沌への変化が促されたことは間違いない。しかし今日の神輿渡御では、混沌の拡大に対して神聖化という主催者の戦略が試みられおり、その支配的メッセージが参加者に交渉的な立場から解釈され、大筋で受け入れられることによって、一定の秩序が達成されている。

以上をふまえ、柳田と松平の議論に対してイベントから「伝統」へと付け加えたい。イベントから「伝統」へとは、イベントが町内だけにとどまらない担い手によって行われる、主催者による神聖化と参加者による受容によって混沌が縮小し、秩序が達成されているものへとなりつつある行為、つまり「伝統」になったことをさす。ここでいう「伝統」とは、神聖化言説における高尚な意味づけを代表する言葉であり、祭礼の変化しづらい側面や信仰面などを強調することにより、多様な解釈の幅を減らし、個々人による創造的な運用をやめさせようとするものだ。本論文では神輿の担ぎ手の一部が、神輿渡御を喧嘩・飲酒の場などとして解釈してきたことについて論じてきた。このような多様な解釈に対して「伝統」は、一定の秩序を求める主催者などのアクターにとって適切な解釈を肯定し、それ以外のより世俗的･現代的な解釈を批判することをとおして、多様な解釈をそれらのアクターにとって適切な解釈に収斂させる効果を発揮している。つまり観光化・世俗化によって増加してきた祭礼への解釈は、再び「伝統」によって減少しつつある。

このようなイベントから「伝統」への変化を、神事－イベント軸での揺れ動きとして捉えれば、「伝統」はイベントから神事への揺り戻しとして説明できる。しかしながら秩序－混沌軸での揺れ動きとして捉えれば、「伝統」は、徹底した管理による秩序化の進展、つまりイベント化に含意された秩序化の延長線上にあるものとして説明できるだろう。この意味において「伝統」は、単なる過去への回帰現象というよりは、現代の祭礼が迎えた新しい局面である。

本論文の知見は、先行する芦田や有本尚央の知見とどのように異なるといえるのか。まず芦田［2001］の祝祭の封じ込め仮説に対しては、東京圏においてもみられる妥当性のある論証である一方で、主催者による封じ込め戦略に加えて、参加者の間でもそれが一定程度歓迎されていることも、神事化の原因であることを指摘したい。そして有本［2017］のスポーツ化に対しては、同じく東京圏においてもみられる妥当性のある論証であること、その上で近代スポーツの特徴とは反すると思われる神事や伝統の強調という神聖化戦略を、スポーツ化という視角からどのように分析できるのか、日本有数のポピュラリティを有する岸和田だんじり祭では神聖化はみられないのかといった新たな疑問が生じたことを指摘したい。

本論文では、祭礼の神聖化を主催者と参加者というアクターに限定して論じてきた。筆者には神聖化という戦略が、祭礼に関係するさまざまなアクター、たとえば警察、祭礼に参加しない住民、文化財・観光行政、そして観光客などの欲求との親和性も高いもののように思われる。今後の展望として、主催者と参加者の激しい対抗が生じたわけではない祭礼においては、これらのアクターの間での政治によって、祭礼の神聖化が推進されているという仮説を提示できる。引き続き、こうしたアクターの間での政治に注目した研究が行われるべきであろう。

祭礼の神聖化は、普遍的価値のもとでの参加者の再統合をうながすものであり、地域主義的な視点から評価すべきものでもある。現代社会における高尚な意味づけの好例であるユネスコ無形文化遺産登録について論じた沼田愛は、登録を交渉的な立場から解釈した担い手の間で、伝承に対する意識が強化されたことを指摘している［沼田 2018: 37］。今後の研究ではこの視点に加えて、登録をもちいて祭礼を秩序化することが意図されているという視点からの分析も必要であることを指摘しておきたい。

註

(1) 本論文では東京圏を、「江戸前」と称される美的感覚が共有されている祭礼やイベントが多数存在する地域として定義する。この美的感覚については、三隅［2017a］が論じている。

(2) 本論文では神幸祭を、「神社の御例祭や夏祭などの折に神霊が一時的に神輿や鳳輦あるいは御座船などに乗つて、本社を離れ、お旅所に渡御したり、氏子区域を巡幸する祭事」［茂木 2013: 726］として定義する。先行研究は、祭りとイベントとの差異を神の有無から説明してきた［たとえば、和崎 2009: 83］。しかし神輿パレードにおいても御霊入れ神事が行われる現代の東京圏においては、このような説明は困難だといえよう。そのため本論文では、これらの差異について神幸祭と目的に対する手段の 2 点から説明を試みている。この定義は、神輿渡御にはかならず御霊入れ神事があることを意味しているが、御霊入れ神事があるから神輿渡御であると主張するものではない。なお、イベントを目的に対する手段として定義する視点は、芦田［2001: 35］や、神輿パレードにかんする資料［たとえば、国分寺まつり実行委員会 2019; 板橋区観光協会 2019］を参照している。

(3) 本論文では神輿会を、「年に複数回、祭礼やイベントにおいて神輿を担ぐことを続けている神輿

愛好家による集団」［三隅 2016: 10-11］として定義する。

(4) 和崎春日は、この 3 者による神事化の報告以前に、イベントにおける儀礼性の生成を、イベントが結集の核として儀礼性（和崎の議論では、共同原理や由緒がこれにあたり、神や神事ではない）を求めたものとして説明した［和崎 2009: 85-86］。筆者は後述するように、神事化現象はこの視点からも分析できると考える。

(5) この批判にかんしては、先行する大石［1999］、和崎［2009: 85-86］などを参照のこと。

(6) 秩序化を望む人びととしては、祭礼における日常的秩序からの逸脱を規制する立場の警察や、祭礼に参加しない住民などがあげられるだろう。たとえば中里亮平は、1960 年代のくらやみ祭を事例として、新住民が大祭委員会や参加者を一定程度譲歩させ、秩序化を達成してきたことを論じた［中里 2010: 128-131］。本論文は、現代社会における神事のありようにかんする問いを立てるものであり、その問いに答えるために、主催者による神事や伝統の強調と参加者によるその受容だけを研究対象としている。そのため警察や祭礼に参加しない住民などによる秩序化をめざす取り組みにかんしては、今後の研究の展望として提示するにとどめたい。

(7) 筆者による文化政治という視角は、文化論的転回以後の文化研究における政治概念と軌を一にするものである［たとえば、吉見 2003: 7-28 など］。

(8) 本論文と同様の戦後三社祭盛衰の歴史を描いた研究として、岡本［2018］があげられる。本論文と岡本の記述は、1960 年代から 80 年代の新聞記事における三社祭への来場者数や記述をまとめることで 70 年代の三社祭の人気の高まりを記述する部分において超複している。しかしこの部分にかんしては、筆者はすでに修士学位論文［三隅 2017b］においてこの手法を利用しており、岡本の研究との直接の参照関係を持たない。

(9) これらの来場者数の多くは、主催者や警視庁浅草警察署が発表したものではあるが、かならずしも正確な数字とはいえないことに留意しなければならないだろう。

(10) 『朝日新聞』1981 年 10 月 3 日朝刊「あす江戸神輿大会」による。

(11) 『朝日新聞』1984 年 7 月 30 日夕刊「みこしに乗った組員ら逮捕　三社祭」による。

(12) 国分寺市の「国分寺まつり」は、「『ひろげよう市民の輪』をテーマに地域産業と市民生活の関わりを深めること」［国分寺まつり実行委員会 2019］を、板橋区の「第 48 回板橋区民まつり」は、「来場者・出場者の皆さんと板橋区が一丸となり、国内外へ『いたばしの元気』」［板橋区観光協会 2020］を発信することを目的として神輿パレードを実施している（後述のとおり国分寺まつりは、現在神輿パレードを実施していない）。

(13) 『朝日新聞』1988 年 2 月 10 日朝刊「建国記念の日、式典めぐり奉祝側と反対側の対立激化」による。

(14) 地域振興系や奉祝系とは異なり、神輿会の連合会が主催することが多い交流系神輿パレードでは、参加する神輿会は同じ連合会に所属し、責任も明確であるため主催者にとっての問題行為は生じづらい。管見では交流系神輿パレードにおいて、神事が行われることは多くない。しかし奉祝系神輿パレードと同様に、政治家による日本の伝統の強調現象はしばしばみられる（たとえば、日本神輿協会が主催する「大江戸神輿まつり」など）。

文献

秋野淳一　2018『神田祭の都市祝祭論 - 戦後地域社会の変容と都市祭り』岩田書院

浅草警察署警備課長　2002『平成 14 年度三社祭宮出し実施方法変更に伴う趣旨』

浅草神社・浅草神社奉賛会　2006a『通達書』

浅草神社・浅草神社奉賛会　2006b『平成 19 年度浅草神社例大祭「宮出し」「宮入り」参加規約（同好会様向け）』

浅草神社・浅草神社奉賛会　2008『浅草神社例大祭（三社祭）神輿乗り禁止に関する本旨』
浅草神社奉賛会　2019「三社祭 公式情報」<https://www.sanjasama.jp>（2019 年 7 月 13 日取得）
朝日新聞社会部東部支局編　1986『新下町事情』講談社
芦田徹郎　2001『祭りと宗教の現代社会学』世界思想社
阿南　透　2016「青森ねぶたの現代」宮田　登・小松和彦監修『青森ねぶた誌 増補版』青森市
有本尚央　2017「都市祭礼における『暴力』と規制―『スポーツ化』する岸和田だんじり祭」『フォーラム現代社会学』16
板橋区観光協会　2019「第 48 回板橋区民まつり」<http://itabashi-kanko.jp/fes.html>（2020 年 1 月 14 日取得）
及川祥平　2017『偉人崇拝の民俗学』勉誠出版
大石泰夫　1999「芸能の二面性（神事性と娯楽性）」小松和彦・野本寛一編『芸術と娯楽の民俗（講座日本の民俗学 8）』雄山閣
岡本亮輔　2018「三社祭から“やんちゃな輩”を排除すべきか―『自分たちの祭り』の感覚は正当か」<https://president.jp/articles/-/25142>（2019.7.11 取得）
国分寺まつり実行委員会　2019「第 36 回国分寺まつり」<http://www.city.kokubunji.tokyo.jp/kurashi/1011887/1012260/1013875/1013631.html>（2019.10.19 取得）
菅井冴織　2015「神事化する地域イベント―山形県寒河江市の寒河江八幡宮例大祭と『神輿の祭典』を中心に」『東北学院大学教養学部論集』171
住吉史彦　2016『浅草はなぜ日本一の繁華街なのか』晶文社
塚原　晃　2012「三社祭から“粋”が失われることへの懸念」『実話マッドマックス』8（7）
天長節奉祝祭実行委員会　2018『平成 30 年 12 月 23 日 天長節奉祝祭 企画書』
東京情報編集部編　1978『月刊東京情報』2（11）
東京都都市計画審議会　2016「2040 年代の東京の都市像とその実現に向けた道筋について 答申」<http://www.toshiseibi.metro.tokyo.jp/keikaku/shingikai/pdf/toushin_1.pdf>（2019.10.19 日取得）
中里亮平　2010「変更からみる祭礼の現代的状況―東京都府中市大国魂神社くらやみ祭の事例から」『日本民俗学』261
日本の建国を祝う会　2019『建国記念の日 奉祝パレード X 會の神輿参加同意書』
日本神輿協会アカデミー編　2010『日本神輿同好会名鑑―日本神輿協会 創立 30 周年記念』日本神輿協会アカデミー
沼田　愛　2018「無形文化遺産登録を乗り越える―宮城県仙台市『秋保の田植踊』から考える」『民俗芸能研究』64
松平　誠　2008『祭りのゆくえ―都市祝祭新論』中央公論新社
三隅貴史　2016「『神輿会』研究の課題―都市祭礼研究の一視点」『京都民俗』34
三隅貴史　2017a「東京周辺地域の祭礼における『江戸前』の美学の成立―神輿会に注目して」『日本民俗学』292
三隅貴史　2017b「神輿会の民俗学的研究―『江戸前』スタイルの意味するもの」関西学院大学 大学院 社会学研究科 修士学位論文
三隅貴史　2020「祭礼における共同性はいかにして可能か―東京圏の神輿渡御における町会－神輿会関係を事例として」『ソシオロジ』197
茂木貞純　2013「神幸祭」神道文化会編『神道要語集 祭祀編』神道文化会
矢島妙子　2015『「よさこい系」祭りの都市民俗学』岩田書院
柳田國男　1998（1942）「日本の祭」『柳田國男全集 13』筑摩書房

吉見俊哉　2003『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』人文書院
リーチ , エドマンド　1990（1961）『人類学再考 新装版』（青木保・井上兼行訳）思索社
和崎春日　2009「祭りからイベントへ、イベントから祭りへ」小島美子･鈴木正崇･三隅治雄･宮家　準･宮田　登・和崎春日監修『祭・芸能・行事大辞典 上』朝倉書店
Hall, Stuart 1996 (1980) “Encoding/decoding,” Stuart Hall, Dorothy Hobson, Andrew Lowe and Paul Willis eds., *Culture, Media, Language: Working Papers in Cultural Studies, 1972-79*, Oxon: Routledge.
Hymes, Dell 1975 “Folklore’s Nature and the Sun’s Myth,” *Journal of American Folklore*, 88 (350)